

W56a 全天X線監視装置 MAXI の現状と地上ソフトウェア開発

根来 均、小笠原直進、中村一尋、高橋知義（日本大学）、富田 洋、上野史郎、倉又尚之、石川真木、森井幹雄、川崎一義、松岡 勝（JAXA）、三原建弘、小浜光洋、磯部直樹（理化学研究所）、吉田篤正（青山学院大学）、河合誠之（東京工業大学）、常深 博、宮田恵美（大阪大学）

国際宇宙ステーションに搭載予定の全天X線監視装置 MAXI は、2008 年度にスペースシャトルにより打ち上げられることがほぼ確実となり、現在、それに向けて諸機関で検出器や地上支援装置、各種ソフトウェアの開発を行なっている。今年9月には一次噛み合わせ試験が筑波で行なわれ、それに向けて検出器のみならず、運用時に利用する地上ソフトウェアの開発も行なっている。

日本大学でもデータ処理部の根幹となる、配信されるデータの取得と配信、工学値変換処理、データ公開処理システムへの配信処理を行なう本格的なデータベース機能を備えたデータ処理システムの開発と、運用を想定した様々な試験を行なっている。また、同システムから配信される工学値変換されたデータを用いて、リアルタイムに突発天体の発見を行なうシステムも開発中である。

発表では、MAXI 全体の開発現状を含め、これらの地上ソフトウェア開発の現状と今後予定を報告する。